

<参考：教員の理解を得るための「教員ワークショップ」武蔵野市国際交流協会>

武蔵野市国際交流協会は、地域の国際化のための事業を市民レベルで実施しており、これらの活動を通して在住外国人やNGOのスタッフとのネットワークを築いている。これらの人々は国際理解を促進する“リソース”である。未来を担う子どもたちのために、これらの生きたリソースを学校に繋ぐのは国際交流協会の役割であると考えている。さらに、リソースの魅力や活用法を教員に理解してもらわないとせっかくのリソースが生きないため、外国人やNGOスタッフの派遣事業と併行して、「教員ワークショップ」を開催し、教員が優れたファシリテータとなれるよう実践研究を行っている。

団体名		武蔵野市国際交流協会（東京都武蔵野市） http://www.mia.gr.jp/	
団体の概要	活動開始年	西暦 1989年 10月 活動開始	
	メンバー 人数	<役員数> 13名 <事務局スタッフ数> 8名 <ボランティア数> 会員登録者は全て<賛助会員数> 933名 <その他> 外国人会員 1124名(66カ国)	
		構成	会社員、主婦、学生他
	予算規模	平成13年度概算 収入 57,590,000円 支出 53,450,000円	
団体の目的		武蔵野市民と世界の人々との幅ひろい交流促進を目指し、国際平和に寄与する開かれたまちづくりを目的とする。	
学校と連携しているボランティア活動の概要		<活動の概要> ・協会登録の外国人会員の地域参画(ボランティア活動)の一つとして外国人派遣や地球規模の課題をリアリティをもって、児童生徒に伝えられるNGOスタッフの派遣事業を行っている。 ・これらの在住外国人やNGOと協働型での国際理解教育の授業づくりをめざして、学校の教員向けに「教員ワークショップ」を行っている。 <ボランティアの募集方法> ・外国人会員向け情報紙で、学校での活動に興味のある人を年度初めに募集し、オリエンテーションを行っている。 ・教員ワークショップ参加者募集は、教育委員会経由でチラシを配付している。	

教員ワークショップの実施のきっかけと経緯

総合的な学習の時間の4つの柱の一つに「国際理解」が入っていることを知り、2000年度にまずは、「教員ワークショップ」を事業として企画した。その際に、これまでの仕事の中で個人的に知り合いになっていた熱心な教員5名に声をかけ、企画の段階からボランティアで入ってもらい、数回の話し合いをもつことによって、当事者主体の事業として立

ち上げた。2001 年度には、外国人等派遣事業を立ち上げ、教員ワークショップ参加教員が実際に在住外国人との協働で授業実践を行った。2002 年度には NGO との連携で、協働での授業づくりに取り組んでいる。

学校との連携を行う際のポイント

まずは、熱意のある教員との個人的なネットワークが重要であると思う。事業ベースにのせるときは、熱意のある教員ほど忙しく、このような地域の継続した活動に参加すること自体が困難であるため、教育委員会や学校長から組織としての理解を得て、教員が地域に出やすい環境を作ることが必要である。国際交流協会が組織として連携をとる努力をしたことにより、3年目の2002年に行われた夏期教員ワークショップについては、教育委員会が研修として位置付けてくれた。

なお、NGO との連携については、教員が NGO についてほとんど知識がないという実態があり、最初に教員自身が NGO を理解する必要があった。そこで教員ワークショップで NGO との出会いと話し合いの場を設けるようにした。

教員ワークショップの成果

2年目には教員ワークショップに参加していた教員が、実際に在住外国人と協働での授業実践を行い、子どもたちに在住外国人の存在が認識されるようになった。また2年間の実践研究を報告書にまとめたことにより、本来の国際理解教育のあり方を広く知ってもらい、現場の教員の授業づくりの参考にしてもらうことができた。学校での取り組みに参加しようという在住外国人の登録も増えた。

今後の課題と展望

個人ベースの連携では、学校の教員の異動によって、これまで積み上げてきたものが振り出しにもどってしまう。教育委員会との連携も担当者が変わると、連携の内容が希薄になってしまうという状況がある。教育委員会が実態として、予算ベースで連携の枠組みを作ってくれることを期待している。また、外国人との協働での授業実践をまとめた「学校と地域がつくる国際理解教育～教員ワークショップ報告書 2002」に引き続き、2003 年



<ワークショップ外国人・NGO との共同での授業づくり>
には NGO との協働での授業について、実践研究報告書を発行する。これらの報告書を糧にしながら、今後も教員ワークショップと外国人等派遣事業を中心に、学校との連携を模索していきたい。
(事務局スタッフによるレポート、団体資料より作成)